

P2-054

小児の在宅療養を支援する専門職が認識する支援上の特徴と課題

岡田 摩理¹、山口 桂子²¹日本赤十字豊田看護大学²日本福祉大学看護学部

【目的】

近年在宅で療養する重度の障がい児は増加しており、多職種が連携して生活を支援しているが、望ましい支援の在り方は未だ模索段階である。そこで、支援をする専門職の認識から、支援上の特徴と課題を見出し、今後の支援の在り方を検討することとした

【研究方法】

対象：A県内で在宅療養をする障がい児の支援に3年以上携わっている専門職13名（外来看護師2名、ショートステイを行う施設の看護師2名、訪問看護師2名、保健師3名、医師3名、社会福祉士1名）

調査方法：2014年7～12月に支援上の成果や困難感等の認識について、個別に半構造化面接を行った。面接内容を逐語録にし、1) 支援する中で捉えた小児と家族の特徴2) 各職種が認識している役割・機能3) 支援上の課題と要望について、意味内容ごとにコード化「」・カテゴリー化【】を行った。

【倫理的配慮】

B大学研究倫理審査委員会の承認（看25-35）を得た。

【結果】

1) 小児と家族の特徴には【生活全体に多種の課題を抱える家族】【望ましいケアや支援を親自身が模索】【臨機応変な工夫を必要とする小児と家族の多様な状況】の3つのカテゴリーがあった。

2) 各専門職が認識する役割機能に関するカテゴリーは【地域につなぐ保健師役割と戸惑い】のように、役割遂行上の悩みやジレンマを伴っていた。また【支援者が共通して必要と認識する姿勢】もあった。

3) 支援上の課題には3つのカテゴリーがあり、「継続的な会議開催の困難さ」や「部署間の共通認識の持ちにくさ」、「複数の施設の間職種間の連携の課題」などから成る【情報共有を困難にする個人の認識や施設の背景】、「医療と福祉のルールの違い」や「市町村ごとに異なる複雑な福祉行政」などから成る【医療と福祉の制度の違いからくる専門職間の戸惑い】、「小児を対象とする施設の少なさ」や「役割を果たしにくい相談支援専門員の現状」、「医療的ケアのエビデンスが確立していないことによる物品管理の難しさ」などから成る【小児を支援する上での施設・制度・根拠の不足】が抽出された。

【考察】

各専門職は在宅療養中の小児と家族の特徴を捉えて、多様な状況に合わせて支援を行い、職種ごとの役割機能を果たそうと努力と工夫を重ねているが、専門職固有の課題と共通の課題があり、お互いの役割機能を理解した連携が必要となることが考えられる。また、施設や制度・根拠の整備は途上であり、今後も充実させていくべき課題である。

P2-055

医療的ケアを必要とする子どもとその家族の地域社会との繋がりに関する文献研究

菊原 美緒^{1,2}、梅津 靖江³、瀬川 千春⁴、玉崎 章子⁴、前垣 義弘⁴、花木 啓一¹¹鳥取大学大学院医学系研究科 保健学専攻²防衛医科大学校医学教育学部 看護学科³帝京科学大学医療科学部 看護学科⁴鳥取大学医学部附属病院小児在宅支援センター

【緒言】

近年、医療技術の進歩により、超未熟児や先天異常をもつ小児も救命されるようになり、退院後も人工呼吸器等の高度な医療的ケアが必要な小児が増加している。このような子どもを養育する家族は、常にのちと向き合い、24時間ケアすることへの負担を感じながら生活をしている。これらの子どもと家族が安心して生活するためには、今後、地域における社会的支援の一層の充実が必要とされるが、その現況は明らかでない。そこで、本研究では、医療的ケアが必要な子どもとその家族が地域社会でどのように繋がり生活しているのかを明らかにすることを目的として、文献のシステムティックレビューを行った。

【方法】

医学中央雑誌Web版を用い、キーワードとして「医療的ケア」と、「地域社会ネットワーク」または「社会資源」を有する文献を検索した（実施2018.1.4）。対象は、障害者自立支援法施行の2006年以後に国内で刊行され論文とした。検索では、「医療的ケア」and「地域社会ネットワーク」で30件、「医療的ケア」and「社会資源」で30件の計60件が該当し、総説、解説、講演集を除いた原著論文14編を解析の対象とした。各文献を、テーマ、種類、発表年、方法、目的、内容により分析し、医療的ケアを必要とする子どもとその家族の地域社会との繋がりに関する文献研究の動向を解析・評価した。

【結果】

対象14編の研究デザインは、質的研究5編、量的研究6編、実態調査3編であった。テーマは、地域連携や社会資源の活用についての家族の思いやニーズ7編、特別支援学級など学校での医療的ケア2編、訪問看護師からみた医療的ケアの課題3編、医療機関からみた医療的ケアの課題3編であった。各論文では、在宅療養開始直後には医療機関との繋がりが強かったが次第に地域の社会資源の利用が増加したことが、成長発達に伴う療育の困りごとを親の会のメンバー・友人・仲間と相談したこと、訪問看護ステーションで医療的ケアだけでなく発達を促す遊びの援助を多職種連携で取り入れたこと、学校での安心できる医療的ケアの支援体制の強化が記述されていた。

【考察】

医療的ケアが必要な子どもとその家族が子どもの成長発達に応じて切れ目なく地域の社会資源と繋がること、地域のソーシャルキャピタルの一層の醸成が今後の重要な課題と考えられた。